

詩時評

第25回

詩は悪霊を追い出す

松本衆司

苗村吉昭著『民衆詩派ルネッサンス実践版』（土曜美術社出版販売）を読む。詩界変革を歌う著者の力のこもった実践評論集である。その本論第五章に若松英輔の『中学生の質問箱 詩を書くってどんなこと？』の箇所を引用している。（平凡社）の中の行が引かれている。その箇所を引く。

これまでの人生で、後悔は数えきれないほどあるのですが、その一つに若いときから詩を読まなかったこと、書かなかったことがあります。／詩を読んでいけば、あれほど孤独に苦しむこともなかったのではないかと。／詩を書いていけば、もっと自分なにかにあるものをたしかに感じることができ

たのではないかと考えるのです。／苦しいとき、悲しいとき、それに向き合うことは簡単なことではありません。しかし、そのとき、友が一人いれば生き抜くことができただけではないかと、今は感じています。／そして、自分にとって大切な人の問題も、もっと深く感じ、考えることができたのではないかと、と後悔しているのです。

右の行を引用したあと、苗村はこう続ける。「私はこの若松の詩への信頼感に感動する。若松が敬愛した柳宗悦は、本当に美しいものは飾られるために作られたのではなく用いられるために作られたものでなくてはならないと考えていたが、若松もまた詩をそのように考えていることだろう。こうした若松の思想を理解した後で、「書く理由」という詩を読んで欲しい。これこそが、新・民衆詩派詩人が理想とする境地なのである」と。

思ったことを／書くのではない／宿ったことを／書くのだと／おのれに／言い聞かせる／何を、どう書こうかと／思い巡らさせることは／ときに、コトバが宿る／邪魔をする／宿りに求められるのは／待つことだ／書くときにも／けつして劣らない／真摯な態度で／待つことだ／これが／自分の刻む／最後の文章だと思つて／書く

ことだ／それらは／生者だけでなく／死者たちにも届くと思つて／書くことだ／この文章は、誰かが／この世で読む／最後の言葉になるかもしれない／そう思つて書くことだ

〔幸福論〕二〇一八年、亜紀書房

右の本を読んだ日は投票率の低い衆議院選挙のくだらない選挙結果の翌日で、その日、たまたま『ルカによる福音書』十一章「ペブル論争」の行を読んだ。「イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した。……」、このフレーズに立ち止まった。右の三つのごとが重なり合つて、現代人も「口を利けなくする悪霊」に自由な心を奪われた人ではないかと、思わず思つてしまった。

丸田礼子詩集『夕陽が背中を押してくる』〔濛標）を読む。〔完結）を引く。

遠くの施設へ行った／振り向かなかった／道のむこうに消えた／／鴨居の／セピア色の／一列の／人々／／やすらかにしずかに眠れ／蜘蛛の巣／土壁／天井／／雨戸ぎしぎしほろほろ／／出征／葬列／花嫁／祭り／／道のむこうに消えた／／からになる／

剥がれ落ちる／崩れ去る

いずれ人は全てと別れる。この詩は訥々と物やシーンに仮託したその終わりの、終わりの感想だ。詩集に収められた幾つもの言葉の中に「ピエタ」や「聖母子」を見出す。生への慈しみの思いが詩人に詩を書かせるのだ。

楡久子詩集『北陸からやってきた』（詩遊社）を読む。「世界の空き地」を引く。

空き地の風／空いっぱい／そよ風になり
／おおきなそよ風は／話し合って／一番困
っている人を乗せて／出かける／車いすの
お爺さんや／病氣療養中の子ども／ゆっく
り目的地に下りて／しばらく待つ／用事
がおわって／ほっとしたら／みんな／風に
揺られて／しばらくうたたね／夕方になっ
て／戻る前に／一番小さな人が手を振る／
それを合図に／／につこりと／空には星も
出る／そんな日があるといひ

さり気ない日常の中に、ふと時間が止まる
ようなときがある。楡久子はそこで大切な
のを掬い取る。右の詩もそんな詩。「一番困
っている人を乗せて」と風に託す。無理のな
い言葉で綴られた真実を求める切実な思いだ。

角野裕美詩集『ちゃうんちゃいます』（土曜美術社出版販売）を読む。「ファイティズ・キグルミン」を引く。

しつかりと張りを持ち／私自身にびつたり
と寄り添っていた肌は／三十 四十 五十
／と齢を重ねるに伴い／年年歳歳 浮き上
がるようになっていった／／朝の目覚めが
どんどんドヨンとしはじめると同時に／よ
れていく肌／重力に逆らえないたるみ／年
相応であるならばまだ／御の字といったテ
イとなる頃／それでも／毎年行われるよう
になった同窓会では／いつだって／中学生
や高校生の私に戻れているのだ／／もっぱ
ら世間は／私のことを／あるときは中年夫
の古女房／あるときは社会人の娘を持つ母
／あるときは年嵩の講師／と／見えている
ガワの／皮膚に着目をしなざっては／つま
りは／立派なおバハンだと／ご判断して下
さる模様／求められるものは／中年女性と
しての望ましき振舞い／ああ 宜なるか
な／／けれど／私はわかるようになって
きた／中身はフォーエバーヤング／意識な
んで／そうそう歳を取るもんじゃないのよ
つて／結構／弱くて／ずるくて／青臭さも
残っていて／経験した分の知恵は得られて
も／駄目な／未熟なままの私がいるってこ
と／大声で叫んでもみたくなる／／二十代

のピツタリしたガワじゃわからなかった／
浮き上がったガワそのものは／いうならば
／五十代の着ぐるみ／ガワと中身の齟齬も
／まま 面白みと受け取って／まずは／愉
しんでいこうじゃないか／／ファイティ
ズ・キグルミン

大阪の「おバハン」の「ガワ」の「中身」
のあれこれが見事な話術で語られた詩集だ。
私たちは大人に憧れるが、「未熟」をなくさ
ないことこそが、また至純なものと繋がれつ
づけることでもあろう。確かなことは、詩や
芸術の出自もまたそこにあるということだ。

以倉紘平著『わが夜学生』（編集工房ノア）
を読む。三章に分かれ、多く「夜学生」に関
するのは第二章。他の二章はいずれも優れた
長短の随想が並び、巻末には念入りな自筆年
譜が添えられている。年譜より「一九七二年
（昭和四十七）三十二歳」の行を引く。

ガリ版刷りの『今工生の証言集』を作製。
機械科・電気科・建築科二年生の生徒たち
全員に、生まれて夜学に入學するまで、い
わゆる「自分史」を書く授業をした。書か
れた作文は、家に持ち帰って、鉄筆でガリ
版に切り、学校で謄写印刷してクラス全員
に配布した。授業中、生徒各自が、読み、

作文を書いた級友に、手紙を出すという作業を繰り返した。結果として自分の苦勞は自分だけのものではないということ、クラスメイト全員がそうであることを私も含めて理解することができた。背景に時代と社会のいかなる問題が潜むのか、あとは私と生徒たちの宿題として残った。当時の私の国語の試験は、自分が一番感動した作文の作者に手紙を書くことであつた。

私事を書く。以倉紘平は母校の先輩であり、彼の長兄以倉隆先生に私は英語を学んだ。不出来な生徒であつたので、この七二年当時は大卒浪人の身であつた。その時代に、以倉紘平は今宮工業高校定時制の先生として多くの苦勞と喜びを生徒とともにしていたのだ。以倉紘平の詩文学の原点を見る思いだ。

古賀博文著『戦後詩界二重構造論―反撃の試論Ⅱ―』（土曜美術社）を読む。「詩史」の行間から垣間見える百年余の流れの(6)もう一つの詩の系脈」で古賀は松永伍一の『日本農民詩史』に触れ、松永の「はしがき」の一節を引用している。転載したい。

私は農民の血をうけ、詩を書いてきた人間であり、二十七年間村に住み百姓もしてきた体験を内攻していく過程で、日本の農

民詩の系脈にさぐりを入れる決心をしたのである。(中略)これは「墓堀り」の仕事ではないか、というおもいかられたとき、しかし私は地中の無言の詩を「鉱脈」と見ることができた。(中略)私がこの日本農民詩史を書くとしたのは、単なる無名詩人たちへの鎮魂歌をつづるためではなかつた。むしろ、表現しようにも表現のすべを知らずに死んでいった無数の日本農民の内、部世界を代弁し、告発することにあつたというのが正確であるかも知れない。(中略)この方法は「詩を通じた農民の思想史」という裏の意味を強く描き出すことになつたかもしれない。

古賀はこの松永に関わるくだりを「そこにはまさしく近代日本の隆興と繁栄の陰で、公的に搾取され続け、犠牲を強いられねばならなかつた農民・民衆たちの(叫び)が銜している」と結ぶ。詩はいつの時代もドラスティックな権威や権力に對峙し、耐えながら懸命に生きている者の側にある、とする古賀博文の三十年にわたる詩への愛と探求を形にした試論・エッセイの一冊である。

愛敬浩一著『大手拓次の方へ』(土曜美術社出版販売)は、著者と同郷の詩人大手拓次への愛に満ちたエッセイ集である。大手拓次

の「言葉は魚のやうに歩く」を引く。

ことばは　うのをやうにあるいてゆく／ころの　たそがれを、／わずれぐさの　ひかりのなかを、／きえぎえに　けむる　みちのはだへを。／／かげろふいろの　魚のやうに／ことばは　あるいてゆく、／くもりのなかに　にほひのふかれ　ちらばふとき、／ひるがへり　なみだつ　ぞよめきのしづけさに。／ことばは　みしらぬかげにおびやかされ、／眼のない魚のやうに　あるいてゆく。

拓次の「鏡にうつる裸体」や、その作品が書かれた大正九年前の日記の一節に、私は魅せられた経験がある。その詩にも「鏡のおもてに／魚のやうに　ゆらゆらと　うごめくしろいもの、」という「魚」の描写があつた。愛敬浩一は言う。「たぶん、私は大手拓次に對して軽いマニア病にかかつているんだろう。大手拓次の詩なら、何でもみんな気に入ってしまうといった……」とその心酔によって人はまた豊かに生かされるもする。

足立悦男詩集『妖怪たちの棲む町で』(詩誌「菱」の会)を読む。「アマビエ」を引く。

アマビエは予言する妖怪である　江戸の昔

肥後国に忽然と現れて「病流行、早々私を写し人々に見せてくれと申て」と謎めいたことを言い残して海に消えていった／水木さんのアマビエのイラストが公開された暗い森の沼に浮かぶ上半身の姿 長い髪に太いくちばし 周りに星を散らし体は美しいうろこでおおわれている 妖怪というより妖しの国から現れた人魚のように神々しい／水木ロードは海を渡って隠岐の島まで延びている 西郷港から中村まで河童・天吊し・せこ等八体の妖怪オブジェが並ぶアマビエのブロンズ像はかつての武良郷中村にある 水木さんの本名に因んだ武良郷道の終着点である／アマビエの像は 胸に手を当てて何か呟いている 私の姿を絵に描いてコロナ退散を祈って人々に見せてください アマエビの像の前でスマホで撮って友人たちに送っている人もいる 武良郷道のアマビエ像はコロナ退散の宿願成就の護符のように輝いている

あとがきに「駅から記念館まで全長八百メートルの水木ロード（通称）には、両側に水木さんの生み出した百数十体の妖怪のブロンズ像が並んで」とある、この妖怪の棲む境界の町に足立悦男は生まれ育ち、六八歳で妖怪検定に合格、妖怪博士の称号を得た。なんとも夢のある話だ。この詩集は左様に妖怪博

士である詩人から捧げられた水木しげると妖怪たちへの愛しみに満ちた頌歌である。

村岡由梨詩集「眠れる花」（書肆山田）を読む。「花の起源」を引く。

2007年に生まれた次女に「花」と名付けたのは、／「平和」を想起させる名前にしなかったから。／「花」の漢字を分解すると、／「艹」「イ」「匕」となる。／「艹」は植物を、「イ」は生きている人を、「匕」は死んだ人を表す。／その光景が何だかすごく自然で平和に思えて、／娘は「花」と名付けたのだった。／／今、世界は平和ですか。／世界中の人々は今、まるで／空っぽの鳥かごを見て呆然としているみたいだ。／その鳥かごにはきつと、／愛とか、慈しみとか／大切で温かな生き物が入っていたはずなのに、／それがどんなものだったのか、世界は思い出せずにいる。／ドクン ゴホッと ナプキンに落ちてくる／経血みたいに揺れて、世界は／徐々にスピードを上げて汚れていくみたい。／／「ママ、ここにあるナイフで手を切ったらどうなるの？」／「すごく痛いと思うよ。血も出るだろうし。」／「ふーん」／「どうしてそんなこと聞くの？」／「いや、別に。」／いや、別に。って／何て悲しい

言葉だろう。／もつと私を信じてほしい。／心を閉ざさないでほしい。／自分勝手な私がそう言う度に／君は私から遠ざかっていく。／／この世界の綺麗な事的一切を脱ぎ捨てて、／使い物にならない自分をピリピリに破り捨てて、手首をナイフで切り刻むように／君の内側に、真つ赤な言葉を刻みたい。／／私が死んだら、そこらへんにある原っぱに／適当に転がしておいていいよ。／ぞんざいに扱っていい。／時々思い出してくれるだけでいい。／そして偶に生きている美しい君がやってきて、ウジのわいた私の傍に寝っ転がってくれたなら、／それが私たちの「平和」なのかもね。なのかな。／ほったらかしにして、最後に残るものが／きつと大切にならなくてはならないもの。／骨片とか。／思い出とか。／／ただそれだけの、少し拗ねて書いてみたお話。／／素直になれない、ただそれだけの話。／きれいな思い出の上に、／いつかきれいな花が咲くことを願って。

詩集を読んだ後、読者は、しばし詩の深みに填まった自身の心と向き合うことになる。そのような心の作用こそ、果たして芸術の真髄であろう。「物の心を、わかまへしるが、則 物の哀れをしる也。」という本居宣長の言葉が浮かんだ。一本の花に、一つの言葉に生きる「あはれ」をしみじみ思う。